

# 雪解

永井荷風

青空文庫



兼太郎かねたろうは点滴の音に目をさました。そして油じみた坊主枕ぼうずまくらから半白はんぱくの頭を擡もたげて不思議そうにちよつと耳を澄すました。

枕元まくらもとに一間いっけんの出窓がある。その雨戸の割目われめから日の光が磨すりガ

硝子らすの障子しょうじに幾筋いくすじも細く糸のようにさし込んでゐる。兼太郎

は雨だれの響ひびきは雨が降つてゐるのではない。昨日きのう午後ひるすぎから、夜

も深ふけるに従つてますます烈はげしくなつた吹雪が夜明と共にいつか

ガラリと晴れたのだという事を知つた。それと共にもうかれこれ

午ひる近くだろうと思つた。正月も末、大寒だいかんの盛さかりにこの貸二階ひものの半

分西を向いた窓に日がさせば、そろそろ近所さけの家から鮭さけか干物を

焼いく匂においのして来る時分じぶんだという事は、丁度去年の今時分初めてこ

この二階を借りた当時、何もせずにはぼんやりと短い冬の日脚ひあしを見てくらししたので、時計を見るまでもなく察する事が出来るのであった。それにつけても月日のたつのは早い。また一年過ぎたのかなどと思うと、兼太郎は例の如く数えて見ればもう五年前株式の大崩落いぼうらくに家倉をなくなし妻には別れ妾めかけの家からは追出されて、今年丁度五十歳の暁とうとう人の家の二階を借りるまでになった失敗の歴史を回想するより外ほかはない。以前は浅草瓦町あさくさかわらまちの電車通どおりに商店を構えた玩具雑貨輸出問屋の主人であつた身が、現在は事もあろうに電話と家屋の売買を周旋するいわゆる千三屋せんみつやの手先とまでなりさがってしまったのだ。昨日も一日吹雪の中をあつちこつちと駈かけ廻まわつて歩く中一足うちいっそくしかない足駄あしだの齒を折つてし

まった事やら、ズブ濡ぬれにした足袋たびのまだ乾いていようはずもない事などを考え出して、兼太郎はエエままよ今日はいつそ寝坊ついでに寝て暮らせと自暴やけな気にもなるのであった。もともと家屋電話の周旋屋というのは以前瓦町の店で使っていた男がやっているので、一日や二日怠けた処で昔の主人に対して小言のいえようはずもなく解雇される虞おそれもない……。

窓の下を豆腐屋が笛を吹いて通って行った。草鞋わらじの足音がぴちやぴちやと聞えるので雪解ゆきどけのひどい事が想像せられる。兼太郎は寝過ねすぎしてかえつていい事をしたとも思った。突然ドシーンとすさまじい響ひびに家屋を震動させて、隣の屋根の雪が兼太郎の借りてある二階ひさしの庇ひさしへ滑り落ちた。つづいて裏屋根の方で物干竿ものほしざおの落

ちる音。どうやら寝てもいられないような気がして兼太郎は水みずば  
漬なすを啜すすりながら起上った。すぐに窓の雨戸を明けかけたが、建た  
込ちこんだ路地ろじの家の屋根一面降積ふりつもった雪の上に日影と青空とがき  
らきら照輝くので暫しばらく目をつぶって立ちすくむと、下の方から女  
の声で、

「田島さん。家の物干竿うちじやありませんか。」

兼太郎のあけた窓の明りで二階中は勿論もちろんの事、梯子段はしごだんの下  
までぱつと明あかるくなった処からこの家の女房は兼太郎の起きた事を  
知ったのである。

「どうだか家じやあるまいよ。」と兼太郎はそんな事よりもまず  
自分の座敷の火鉢ひばちに火種ひこが残っているか否かを調べた。

「田島さんもうじきお午ひるですよ。」

襖ふすまの外で言いながら、おかみは梯子段を上り切つて突当りに一い間つけんばかり廊下つけんのようになつた板の間まから、すぐと裏屋根の物干へ出る硝子戸ガラスどをばりばり音させながら無理に明けようとしている。いつも建付けの悪いのが今朝は殊ことごと更雪さらにしめつて動かなくなつたのであろう。

この硝子戸から物干台へ出る間の軒下には兼太郎の使つか料りようになつている炭たどんと炭団たどんを入れた箱にバケツが一個と洗面器が置いてある。

「あら、まア田島さん。炭も炭団もびしよぬれだよ。昨夜ゆうべの中うちにどうかしてお置きなされアいいのにさ。」

物干竿を掛直したかみさんは有合う雑布で赤ぎれのした足の裏を拭き拭き此度は遠慮なくがらりと襖を明けて顔を出した。眉毛の薄い目尻の下つた平顔の年は三十二、三。肩のいかつた身体付のがつしりした女であるが、長年新富町の何とやらいう待合の女中をしていたとかいので襟付の紡績縞に双子の鯉口半纏を重ねた襟元に新しい沢瀉屋の手拭を掛け、藤色の手柄をかけた丸髻も綺麗に撫付けている様子。まんざら路地裏の鼻とも見えない。以前奉公先なる待合の亭主の世話で新富座の長吉と鼻肩の客には知られている出方の女房になつて、この築地二丁目本願寺横手の路地に世帯を持ってからもう五年ほどになるがまだ子供はない。



「おかみさん。湯に行つて暖たまつて来よう。今日はいちんちらく一日楽休みだ。」と兼太郎は夜具を踏んで柱の釘くぎに引掛けた手拭ひつかを取り、

「大将はもう芝居かえ。一幕ひとまくのぞいて来ようかな。」

「播磨屋はりまやさんの大蔵卿おおくらぎよう、大変にいいんですとさ。」

「おかみさんまだ見ないのか。」

「お正月は御年始おねんしまわ廻りや何かで家の人がいそがしいもんだから。」

と女房は襟にかけた手拭あねを姉さまかぶりにして兼太郎の夜具を上  
げ、

「ゆつくり行つてお出いでなさい。綺麗に掃除して置きますよ。田島さん、そうそう持つて来るのを忘れてしまった。牛乳が火鉢の処ところに置いてありますよ。」

「今朝はもう牛乳はぬきだ。日が当たつていてもやつぱり寒い。」  
と兼太郎は楊枝ようじをくわへて寝衣ねまきのまま格子戸こうしどを明けて出た。

路地の雪はもう大抵両側の溝板どふいたの上に掻き寄せられていたが  
人力車じんりきしゃのやつと一台通れるほどの狭さに、雪解の雫しずくは両側に並  
んだ同じような二階家やの軒からその下を通行する人の襟えりくび頭しへ余  
沫ぶきを飛ばとばしている。それを避けようと思つて何方どちらかの軒下へ立寄れ  
ばいきなり屋根の上から積つた雪が滑り落ちて来ないともわから  
ぬので、兼太郎は手拭を頭の上に載せ、昨日歯を割つた足駄ひを曳ひ  
摺ぎすりながら表おもて通どおりへ出た。向側は一町ほども引続いた練堀ねりべいに、  
目かくしの椎しいの老木が繁茂した富豪あきの空屋敷こなた。此方こなたはいろいろな  
小売店のつづいた中に兼太郎が知つてから後のち自動車屋が二軒も出

来た。銭湯もこの間にある。蕎麦屋もある。仕出屋もある。待合もある。ごみごみしたそれらの町家の尽る処、備前橋の方へ出る通との四辻に遠く本願寺の高い土塀と消防の火見櫓が見えるが、しかし本堂の屋根は建込んだ町家の屋根に遮られてかえって目に這入らない。区役所の人夫が掻き寄せた雪を川へ捨てにと車に積んでいるのを、近処の犬が見て遠くから吠えている。太い電燈の柱の立っているあたりにはいつの間にも誰がこしらえたのか大きな雪達磨が二つも出来ていた。自動車の運転手と鍛冶屋の職人が野球の身構で雪投げをしている。

兼太郎は狭い路地口から一足外へ踏み出すと、別にこれと見処もないこの通をばいっつもながらいかにも明るく広々した処のように

感じるのであった。そして折々自分はどうしても路地に生れて路地に育った人間ではない、死ぬまでにいつか一度元のように表おもて通どおりに住んで見たいものだと思ふ事もあるのであった。兼太郎がこの感慨は湯屋の硝子戸を明けて番台のものに湯銭ゆせんを払う時殊更深くなる事がある。

築地のこの界隈かいわいにはお妾めかけじんみち新道てがらという処もある位で妾が大勢住んでいる。堅気かたぎの女房も赤い手柄てがらをかける位の年頃としごろのものはお妾に見まがうような身なりをしている。兼太郎は番台越しに女湯で着物をぬぎかける女の中に、小作りのほつちやりした年としま増盛ざかりのお妾らしいものを見ると、以前代地だいちがし河岸がしに囲つて置いた自分のお妾の事を思い出すのである。名はお沢さわといった。大正三

年の夏おうしゅう 欧 洲 戦争が始まってから玩具がんぐ 雑貨の輸出を業とした兼太郎の店は大打撃を受けたので、その取返しをする目算で株に手を出した。とんとん拍子に儲もう かつたのがかえって破滅もと の本であつた。四、五年成金熱に浮かされている中うち、講和条約が締結され一時下つた相場はまた暫く途拍子とつびようし もなく絶頂に達したかと思つと忽たちまち にしてまた崩落ぼうらく した。兼太郎は親から譲られた不動産までも人手に渡して本妻の実家へ子供をつれて同居するといふ始末、代地河岸に困つてあつたお妾のお沢は元の芸者の沢次さわじ になつた。幸い妾しやうたく 宅の家屋はお沢の名儀にしてあつたので、兩人話合の末それを売つて新あらた に芸者げいしや 家沢や の家の看板をかう資本にした訳わけ である。兼太郎は本妻との間にその時八つになる男と十三になる娘が

あつたにもかかわらず、いつか沢の家に入りびたりとなつた。本妻の実家は資産のある金物問屋の事とて兼太郎の身持に呆れ果て子供を引取つて養育する代り本妻お静の籍を抜きやがて他へ再縁させたという話である。

丁度そんな話のあつた頃から兼太郎は沢次の家にもどうやら居辛いようになつて来た。初めの中は旦那の落目に寝返りをしたなどと言われては以前の朋輩にも合す顔がない。今までお世話になつた御恩返しをするのはこれからだと沢次は立派な口をきいていたが、一年二年とたつ中いつか公然と待合にも泊る。箱根へ遠出にも行く。兼太郎は我慢をしていたが、遂には抱えの女供にまで厄介者扱にされ出したのでとうとう一昨年あつかいの秋しよんぼりと沢

の家を出た。さすがに気の毒と思つたのか沢次はその時三千円と  
 いう妾宅を売つた折の金を兼太郎に渡した。以後兼太郎はあつち  
 こつちと貸間を借り歩いた末、今の築地二丁目の出方でかたの二階へ引  
 つ越して来た時には、女から貰もらつた手切てぎれの三千円はとうに米屋  
 町ちで大半あらかたなくしてしまい、残のこりの金は一年近くの居食いぐいにもう数  
 えるほどしかなかつた。

雪は止やんだ。裸はだかむし虫ここうらの甲羅を干すという日和ひよりでもない  
 ので、男湯には唯ただ一人いけばな生花の師匠とでもいうような白髭しらひげの隠  
 居が帯を解きいているばかり。番台の上にはいつも見る婆ばばあも小娘も  
 いない。流しきくだの木札きくだの積そばんである側そばに銅貨がばらばらに投出した

ままになつてゐるのは大方隠居の払つた湯銭ゆせんであろう。兼太郎も湯銭を投出して下駄をぬごうとした時、ガラガラと女湯の戸をあけて入つて来た一人の女がある。

色系の入つた荒いかすり緋めいせんの銘仙に同じような羽織を重ねた身なりといい、頤あごの出た中なかびく低な顔立といい、別に人の目を引くほどの女ではないが、十七、八とおほ覺しいその年頃とこの辺へんでは余り見かけない七しちさん三に割つた女じよゆうまげ優鬚じよゆうまげとに、兼太郎は何の気もなくその顔を見た。娘の方でも番台を間に兼太郎の顔を見るといかにも不審そうに、手にした湯銭をそのまましばらう暫く土間の上に突立つたつていたが、やがて肩で呼吸いきをするように、

「まあお父とつさんしばらくねえ。」といつたなり後あとは言葉が出ぬら



しい。

「お照<sup>てる</sup>。すっかり見ちがえてしまったよ。」

兼太郎は人のいないのを幸い番台へ寄りかかって顔を差<sup>さ</sup>伸<sup>の</sup>し  
た。

「お父さんいつお引越しになったの。」

「去年の今<sup>いま</sup>時<sup>じ</sup>分<sup>ぶん</sup>だ。」

「じゃ、もう柳<sup>やなぎ</sup>橋<sup>ばし</sup>じゃないのね。」

「お照、お前は今どこにいるのだ。御<sup>お</sup>徒<sup>か</sup>町<sup>まち</sup>のお爺<sup>じい</sup>さんの処<sup>い</sup>にい

るんじゃないのか。」

お照は俄<sup>にわか</sup>に当惑したらしい様子で、「今日はアノ何なの——ち

よつとそこのお友達の内へ遊びに来てはいるんですよ。」

「何しろここでお前に逢あおうとは思わなかった。お照、すぐそこだから帰りにちよつと寄つておくれ。お父さんはすぐその炭屋と自転車屋の角を曲ると三軒目だ。木村ツていう家にいるんだよ。曲つて右側の三軒目だよ。いいか。」

その時戸を明けて貸自動車屋の運転手らしい洋服に下駄げたをはいた男が二人、口笛でオペラの流行はやりうた唄をやりながら入つて来たので、兼太郎はただ「いいかねいいかね。」と念を押しながら本意ほんいなくも下駄をぬいで上つた。お照は気まりわる気げに軽く首肯うなずいて見せるや否や男湯の方からは見えないズツト奥の方へ行つてしまつた。

茶の間の長火鉢で惣菜そうざいを煮ていた貸間のかみさんは湯から帰つて来た兼太郎の様子に襖ふすまの中から、

「田島さん。御飯をあがるんなら蒸して上げますよ。煮くたれててよければお汁つげもあります。どうします。」

「お汁は沢山だ。」と兼太郎は境の襖を明けて立ちながら、「おかみさん、不思議な事もあるもんだ。まるで人情ばなしにでもありそうな話さ。女房の実家さとへ置き去りにして来た娘に逢つたんだ。女湯もたまにやア覗のぞいて見るものさ。」

「へえ。まア——。」

「その時分女房は三十越していい年をしていやがったが、よくよくおれに愛想あいそをつかしゃアがったと見えて他よそへ片付いてしまやア

がったんで、つい娘や子供の事もそれきり放捨うっちゃって置いたんだがね、数えて見るともう十八だ。」

「この辺においてでなさるんですか。まアこつちへお入んなさい。」  
「湯ざめがしそうだから着物を着て来よう。おかみさん娘が尋ねて来るはずなんだ。あんまりじじむさい風も見せたくないよ。」

兼太郎は二階へ上り着物を着換えてお照の来るのを待った。午ひるめし  
飯めしを食べてしまつたが一いつこう向格子戸の明く音もしない。兼太郎は窓を明けて腰をかけ口に啣くわえた敷島しきしまに火をつける事も忘れて、路地から表通の方ばかり見つめていたが娘の姿は見えなかつた。お照はやはりおれの事をよく思つていないと見える。人情のない親だと思ふのも無理はない。尋ねて来ないのも尤もつともだ。手の甲で

水<sup>みず</sup> 洩<sup>ぼ</sup>をふきながら首<sup>くび</sup>をすつ込めて窓<sup>まど</sup>をしめると、何<sup>どこ</sup>処<sup>こ</sup>かの家の  
 時計<sup>とけい</sup>が二時<sup>にじ</sup>を打ち、斜<sup>ななめ</sup>に傾<sup>かたむ</sup>きかけた日<sup>ひ</sup>脚<sup>あし</sup>はもう路<sup>みち</sup>地<sup>ぢ</sup>の中には届<sup>と</sup>か  
 ず二階<sup>にがい</sup>中は急<sup>いそ</sup>に薄<sup>うす</sup>暗<sup>く</sup>くなつた。長い間<sup>ま</sup>窓<sup>まど</sup>に腰<sup>こし</sup>をかけていたので湯<sup>ゆ</sup>  
 冷<sup>さ</sup>めもする、火鉢<sup>ひばち</sup>の火<sup>か</sup>を掻<sup>か</sup>立てて裏<sup>うら</sup>の物<sup>もの</sup>干<sup>か</sup>へ炭<sup>たん</sup>団<sup>どん</sup>を取り<sup>と</sup>り行く<sup>い</sup>とプ  
 ン<sup>ん</sup>プ<sup>ん</sup>鳥<sup>とり</sup>鍋<sup>なべ</sup>の匂<sup>におい</sup>がしている。隣<sup>となり</sup>家は木<sup>こ</sup>挽<sup>び</sup>町<sup>ちょう</sup>の花<sup>かり</sup>柳<sup>ゆう</sup>病<sup>びやう</sup>院<sup>いん</sup>の助<sup>すけ</sup>  
 手<sup>て</sup>だとかい<sup>い</sup>う事<sup>こと</sup>で、つい去年<sup>こぞ</sup>の暮<sup>くれ</sup>看<sup>かん</sup>護<sup>ご</sup>婦<sup>ふ</sup>を女<sup>め</sup>房<sup>ぼう</sup>に貰<sup>もら</sup>つたのである。  
 二階<sup>にがい</sup>から此<sup>こ</sup>方<sup>なた</sup>の家の勝<sup>かち</sup>手<sup>て</sup>口<sup>くち</sup>へ遠<sup>とほ</sup>慮<sup>り</sup>なく塵<sup>ちり</sup>を掃<sup>は</sup>き落<sup>お</sup>すとい<sup>い</sup>うので出<sup>で</sup>  
 方<sup>かた</sup>のかみ<sup>かみ</sup>さん<sup>さん</sup>は田<sup>た</sup>舎<sup>しゃ</sup>者<sup>しや</sup>は仕<sup>し</sup>様<sup>やう</sup>がな<sup>な</sup>いとわ<sup>わ</sup>る<sup>る</sup>く言<sup>い</sup>切<sup>き</sup>つて<sup>て</sup>いる。兼<sup>か</sup>太<sup>た</sup>  
 郎<sup>らう</sup>は雪<sup>ゆき</sup>に濡<sup>ぬ</sup>れた炭<sup>たん</sup>団<sup>どん</sup>をつま<sup>ま</sup>んで独<sup>ひと</sup>り火<sup>か</sup>を起<sup>お</sup>すその身<sup>み</sup>に引<sup>ひ</sup>くらべ<sup>べ</sup>  
 と、貰<sup>もら</sup>つて間<sup>ま</sup>もな<sup>な</sup>い女<sup>め</sup>房<sup>ぼう</sup>と定<sup>さだ</sup>め<sup>め</sup>し休<sup>やす</sup>暇<sup>ま</sup>と覚<sup>さ</sup>しい今<sup>いま</sup>日<sup>にち</sup>の半<sup>はん</sup>日<sup>にち</sup>を楽<sup>らく</sup>し  
 く暮<sup>くれ</sup>す助<sup>すけ</sup>手<sup>て</sup>の身<sup>み</sup>の上<sup>うへ</sup>が訳<sup>わけ</sup>もな<sup>な</sup>く羨<sup>うらや</sup>ましく思<sup>おも</sup>わ<sup>わ</sup>れたので、聞<sup>き</sup>くとも

なく物干一つ隔てた隣の話声に耳をすました。すると物干の下なる内の勝手口で、

「おかみさん、留守かい。おかみさん。」と言う男の声。物干の間から覗のぞいて見ると紺ももひきの股引とうざんじまに唐棧縞ふたこの双子の尻あばたを端折り、上に鉄無地てつむじの半合羽はんがつぱを着て帽子かぶも冠かぶらぬ四十年輩あばたの薄い痘痕あばたの男である。

「伊三いさどん、大変な道だろう。さアお上り。」水口みずぐちの障子を明けたかみさんは男の肩へ手をやって、

「今日は二階にいるんだからね。」と小声に言った。

「そうか。貸間しじいの爺じいかい。じゃまた来ようや。」

「何、いいんだよ。さア伊三どん。おお寒い。」

男を内へ上げた後のち、かみさんは男の足駄を手早く隠してぴった  
り水口の障子をしめた。男は伊三郎という新富町見番しんとみちよう けんぼんの箱  
屋こやで、何でもここの家のおかみさんが待合の女中をしている時分じぶん  
から好い仲であつたらしい。兼太郎は去年の今頃は毎日二階にござ  
ろごろしていたので様子は委くわしく知つていたのであつた。その時  
分には二人は折々二階へ気を兼ねて別々に外へ出て行つた事もあ  
つた。

兼太郎は炬燵こたつに火を入れて寝てしまおうかと思つたが今朝は正  
午る近くまで寝飽ねあきたまぶた瞼まぶたの閉じられようはずもないので、古ぼけた  
にじゆうにじゆうまわしまわし一一重廻ひっかを引掛けてぷいと外へ出てしまつた。本もとより行くべき  
処ところもない。以前ぶらぶらしていた時分行き馴なれた八丁堀はちぢょうぼりの講こ

うしゃくば  
 釈場の事を思付いて、其処で時間をつぶした後地蔵橋の天  
 んぶらや  
 麩羅屋で一杯やり、新富町の裏河岸づたいに帰つて来ると、冬の  
 日は全く暮果て雪解の泥凪は寒風に吹かれてもう凍っている。  
 格子戸をあけると、わざとらしく境の襖が明け放しになつてい  
 て、長火鉢や箆筒や縁起棚などのある八畳から手水場の開  
 戸まで見通される台処で、おかみさんはたった一人後向に  
 なつて米を磨いでいた。

「おかみさん。とうとう来なかつたか。」

「ええ。お出になりませんよ。」とかみさんは何故か見返りもし  
 ない。

兼太郎はわけもなく再びがっかりして二階へ上るや否や二重廻



を炬燵の上へぬぎすてそのままごろりと横になった。向う側の吉よ川しかわという待合で芸者がお客と一所に「三千歳みちとせ」を語っている。

聞くとともにしに聞いている中、兼太郎はいつかうとうとしたかと思うと、「田島さん、田島さん。」と呼ぶ声。

階下したのかみさんは梯子段はしごだんの下の上あがり框がまちへ出て取次あがりをしている様子で「お上んなさいましよ。きつと転寝うたたねでもしておいでなさるんだよ。まだ聞えないのか知ら。田島さん。田島さん。」

兼太郎は匆起はねおききて、「お照か。まアお上り。お上り。」といひながら梯子段はしごだんを駈下かけおりた。

お照は毛織えりまきの襟卷えりまきを長々とコートコートの肩先ひざから膝ひざまで下げ手には買物の紙包紙包を抱えて土間に立っていた。兼太郎は手を取らぬば

かり。

「お照。よく来てくれたな。実はもう来やしまいと思つていたんだ。おれも今<sup>いま</sup>方<sup>がた</sup>帰つて来た処だ。さア二階へお上り。」

「じゃ御免<sup>ごめん</sup>なさいまし。」とかみさんの方へ何とつかず挨拶<sup>あいさつ</sup>をしてお照は兼太郎につづいて梯子段を上った。

「お照、ここがお父<sup>とつ</sup>さんのいる処だ。お父さんも随分變つたろう。」と兼太郎は火鉢の火を掻き立てながら、「ぬがないでもいいよ。寒いから着ておいで。」

けれどもお照は後向になつてコートと肩掛とを取乱された六畳の間の出入口に近い襖<sup>ふすま</sup>の方<sup>ほう</sup>に片寄せながら、

「さつき昼間<sup>うち</sup>の中来ようと思つたんですよ。だけれどお友達と浅<sup>あ</sup>

さくさく  
草へ行く約束をしたもんだから。」

「そうか、活動か。」と兼太郎は小形の長火鉢をお照の方へと押し出した。

「お父さん、これはつまらないものですけれど、お土産みやげなの。」

「何、お土産だ。それは有難い。」と兼太郎は眞実嬉うれしくてならなかつたので、お照が火鉢そばの傍へ置いた土産物をば膝ひざの上に取りつて包紙を開きかける。土産物は何かの缶詰であつた。

「お父さん、やっぱり御酒おさけを上るんでしよう。浅草にや何も無いのよ。」

「ナニこれアお父さんの大好きなものだ。」

兼太郎は嬉うれしなみだなみだに涙なみだに目をぱちぱちさせていたがお照は始終とんち頓とんち

着やくなくあたりを見廻とこす床まの間に二合びん鑪が置いてあるのを見ると自分の言いった事が当あつていたので急に笑わらいながら、

「お父さん、やつぱり寝ねる時に上あるんですか。」

「何なにだ。はははは。とんだものを目め付つかったな。何、これあ昨夜ゆうべ雪ゆきが降ふつたから途中ちゆうちゆうで一杯いっぱいやつたら、もういいというのに間違まちがえてまた一本持もつて来きやがったからそのまま懐ふところ中ちゆうへ入れて来きたんだ。」

「お父さん、今夜こんやはまだなの。お上あんなさいよ。わたしがつけて上げあげましょう。」

丁度手ていどの届とくところに二合びん鑪があつたのでお照あきはそれをば長火ながび鉢ひしの銅壺どうこの中ちゆうちゆうに入れようとして、

「この中へ入れてもいいんでしよう。」

兼太郎は唯首肯うなずくばかり、いよいよ嬉しくて返事も出来ず涙ぐんだ目にじっとお照の様子を見詰みつめるばかりである。お照が二合鑊を銅壺の中に入れる手付きにはどうやら扱い馴なれた処が見えた。

兼太郎は昼間湯屋の番台で出逢であったその時から娘の身の上が聞きたくてならなかつた。しかし以前瓦町かわらまちに店があつた時分から子供の事は一切いっさい母親のお静にまかしたなり、ろくろく顔を見た事もなかつた位。朝起きる時分には娘はもう学校に行つていゝ娘が帰つて来る時分には兼太郎は外へ出て晩飯は妾しやうたく宅で食べ十二時過ぎでなければ帰つては来なかつたので、今日突然こんな成長した娘の様子を見ると、父親としてはいかにも濟まないよ

うな心持もするしまた何となく恨んでいはせまいかと恐ろしいよ  
うな気もして、兼太郎はききたい事も遠慮して聞きかねるのであ  
った。

実際その時分には兼太郎は女房の顔を見るのがいやでいやでな  
らなかつたのだ。気がきかなくてデブデブ肥ふとっている位ならまだ  
しもの事生れ付きひどい腋臭わきががあつたので嫌い抜いたあまり自然  
その間に出来た子供にまでよそよそしくするようになった訳わけであ  
る。兼太郎がその頃目ころもをつける芸者は岡目よそめには貧相ひんそうだと言われ  
る位な瘦やせ立たちな小作りの女ばかり。旅籠町はたごちようへ遂に妾宅まで買つ  
てやった沢次さわじの外ほかに、日本橋にほんばしにも浅草にも月々きまつて世話を  
した女があつたが、いずれも着瘦きやせのする小作こづくりな女であつた。大

柄な女はいかほど容貌きりようがよく押し出しが立派でも兼太郎はさして見返りもせず、ああいう女は昔なら大おおまがき籬の華魁おいらんにするといい、当世なら女優向きだ、大柄な女は大きなメジ鮪まぐろをぶつころがしたようで大おおあじ味だと冗談をいつていたのもそのはず、兼太郎は骨格はしつかりしてはいたが見だてのない小男なので、自分よりも丈せいの高い女房のお静が大おおいちばん一番の丸まるまげ髻姿を見ると、何となくあつぷく圧服されるような気がしてならないのであつた。

それこれと当時の事を思い出すにつけて兼太郎は娘のお照が顔立は母に似ているがからだつき身体付は自分に似たものかそれほどデクデクもしていないのを見ると共に、あの母親の腋臭はどうなつただろうと妙な処へ気を廻した。しかしそれは折から階下したのかみさん

が焼き初めた寒餅かんもちの匂においにまぎらされて確かめる事が出来なかつた。

お照は火針へ差かざす手先に始終お爛かんを注意していたが寒餅の匂においがついたものと見え、「お父さん御飯はどうしているの。下でおまかないするの。」

「家うちにいる時はそうするがね。毎日桶おけちよう町まちまで勤めに行くからね、昼は弁当だし帰りにや花村はなむらかどこかで一杯やらアな。」

「お父さん。それじゃ今は勤め人なの。」

「碌ろくなものじゃないよ。お前は子供だったから知るまいが、瓦町の店へ来た桑崎くわさきという色の黒い太った男だ。それが今成功して立派な店を張っているんだ。そこへ働きに行くのさ。」



「桑崎さん、覚えてるわ。どこだかお国の人でしよう。この頃はどこへ行ってもお国の人ばかりねえ。お国の人皆成功するのねえ。」

「お父さん見たようになつちや駄目だ。御徒町おかちまちのおじいさんも江戸こッ児こじゃないよ。」

兼太郎は話が自然にここへ巡めぐつて来たのを機会にその後の様子を聞こうと、「お照。お前母おっかさんがお嫁に行く時なぜ一所について行かなかつたんだ。連れ児つっこはいけないというはなしでもあったのか。」

「それでもないけれど……。」とお照は兼太郎の見詰める視線を避けようとしてもするらしく始終伏目になっていたが、「お父さん、

もうお爛がよさそうよ。どうしましょう。」

指先で二合鑊を摘み出して灰の中へそつと雫を落している。

「お照、お前どこでお爛のつけ方なんぞ覚えたんだ。」

「もう子供じゃないんですもの。誰だつて知ってるわ。」と猫板の上に載せながら、「お父さんお盃はどこにあるの。」

兼太郎は肝腎な話をよそにして夜店で買った茶棚の盃を出し、「どうだお前も一杯やるさ。お爛の具合がわかる処を見ると一杯位はいけるだろう。」

「わたしは沢山。」とお照は壘を取上げて父の盃へついだ。

「お照。お前にめぐり遇った縁起のいい日だからな。」とぐつと一杯干して、「お父さんがお酌をしよう。飲めなければ飲むまね

でもいいよ。」

「そう。じゃついで頂戴。」

お照は兼太郎が遠慮して七分目ほどついた盃をすぐに干したばかりか火鉢の縁ふちで盃の雫を拭ぬぐって返す手つき、いよいよ馴れたものだと兼太郎は茫然ぼうぜんとその顔を見詰めた。

「お父さん。いやねえ。先刻さつきから人の顔ばかり見て。わたしだつていつまでも子供じゃないわ。」

「お照、お前、お母さんがお嫁に行つてから会つたか。」

「いいえ。東京にやいないんですつて、大阪にお店があるんですとさ。」

「角太郎かくたろうはどうしている。お前が十八だと角太郎は十三だな。」

「角ちゃんは今だつてちゃんと御徒町にいるでしょう。男ですもの。」

「女だといられないのか。」

「いられないっていうわけもないけれど、わたしが悪かったのよ。おじいさんの言う事をきかなかつたから。」

「そんなら謝罪あやまればいいじゃないか。謝罪つてもいけないのか。」

「外の事ほかと違うから、今更帰れやしませんよ。こうしている方がほう呑気のんきだわ。」

「外の事とちがう。どんな事なんだ。」

「どんな事ツて、その中うちに言わなくつても分りますよ。お父さんも道楽した人に似合わないのね。」

「わかつたよ。だが、どうもまだよくわからない処があるな。お照、何も気まりをわるがる事はねえや。そんな事をいつた日にやお父さんこそ、お前に合す顔がありやしない。お前がちやんとおとなしく御徒町の家にいた日にや途中で逢あつたつて話も出来ない訳わけなんだ。そうだろう。乃公おいらは女房や子供をすてた罰で芸者家からもとうとうお履物はきものにされちまつた。それだから、こうしてお前と話もしていられるんだ。」

「それアそうねえ。わたしが御徒町の家を出たからつてお父さんが先せんのように柳橋やなぎばしにいたら、やつぱり何だか行きにくいわね。お父さん、何故なぜ柳橋と別れたの。」

「別れたんじやない。追出されたんだ。もうそんな過ぎ去つた話

はどうでもいいや。それよりか、お照、お前の話を聞こう。表のお湯屋で逢つたんだからこの近所にや違いなかろうが、何処にいるんだえ。お嫁にでも行つたのか。」

「ほほほほ。お父さん。わたしまだやつと十八になつたばかりよ。」

「十八なら一人前の女じゃないか。お嫁にだつて何だつて行けるぜ。自分でもさつきもう子供じゃないつて言つてたじゃないか。」

「それアいろんな心配もしたし苦勞もしたんですもの。」

「お爛はつけるしお酌はできるし、隅すみにや置けなそうだな。お父さんに似ているんな事を覚えたんだろう。ははははは。当て見あてよるか。お茶屋の姐ねえさんにしちや髪や風俗なりがハイカラだ。まずカツ

フエーかバーという処だが、どうだ。お照、笑ってばかりいないで教えたつていいじゃないか。」

「てつきりお手の筋すじですよ。」

「やっぱりカツフェーか。どうもそうだろうと思つた。この近処にやしかし気のきいたカツフェーはねえようだが、何処だい。」

「この間まで人形町にんぎようちようみやこの都バーにいたんですよ。だけれども

もうよしたの。先に日比谷せんひびやにいた時お友達になつた姐さんがこの先の一丁目に世帯を持つてゐるから二、三日泊りながら遊びに来ているのよ。もう随分遊んだからそろそろまた働かなくちやならないわ。」

「カツフェーは随分貰もらいがあるという話だがほんとかい。月にい

くら位になるもんだね。」

「そうねえ、一番初めまだ馴なれない時分でも三、四十円にはなつてよ。銀座にいた時にはヤツぱり場所だわね。百円はかかさなかつたわ。だけれども急がしい処は着物にかかるからつまり同じなのよ。」

「ふーむ偉いもんだな。どうしても女でなくちや駄目だ。お父さんなんか毎日足を棒にして歩いたっていくらになると思う。やつと八十円だぜ。その中で二十円は貸間の代に、それから毎日食べに行かなくちやならないからな。そこへ行くと三十円でもくらしが出なけれア楽だ。」

「だから残そうと思えば随分残るわけなのよ。中には五百円も六



百円も貯金している人もあるけれど、何の彼のつて蓄<sup>たま</sup>つたかと思うとやっぱり駄目になるんですとき。だからわたしなんぞ貯金なんかした事はないわ。有る時勝負で芝居へ行ったり活動へ行ったりして使つちまうのよ。」

「お客様に連れて行つてもらうような事はないのかい。カツフェーだつて同じだろう。お茶屋や待合の姐さんと同じように好いお客や旦那があるんだろう。」

「ある人はあるし無い人はないわ。お父さんもうこれでおつもりよ。」

お照は二合壇<sup>さかさ</sup>を倒にして盃につき、「何時でしよう。わたしもうそろそろお暇<sup>いとま</sup>しなくちやならないわ。二、三日中<sup>うち</sup>に行くと

がきまつたら知らせるわ。」

「まだいいやな。あの夜廻よまわりは九時打つと廻るんだ。」

「今夜これから襦袢じゆばんの襟えりをかけたたりいろいろ仕度しなくちやならないのよ。明日あしたの晩にでもまた来ますよ。お酒と何かおいしそうなものを持って来ますよ。」とお照は立ちかけて、「お父さん、ここのお家、厠はばかりはどこなの。」

お照は約束たがえず翌日あくるひの晩、表おもてどおり通の酒屋の小僧しごうに四合びんの銀釜ぎんがままさむね正宗しんしゆを持たせ、自身は銀座の甘栗あまぐり一包しちろを白木屋しやくぎやの記号しるしのついた風呂敷ふろしきに包んで、再び兼太郎をたずねて来た。甘栗は下のおかみさんへの進物しんもつにしたのである。この進物でか

みさんはすっかり懇意になり、お照が鉄瓶てつびんの水を汲くみにと、下へ降りて行つた時袖そでを引かぬばかりに、

「お照さん、あなた、お爛かんをなさるんならこの火鉢をお使なさいましよ。銅壺どうこに一杯沸いていますよ。何いいんですよ。家じゃ一時でなくつちや歸つて来ませんからね。いつその事今夜はここでお話しなさいましよ。田島さん、ねえ、田島さん。」と後からつづいて手水場ちようずばへと降りて来た兼太郎にも勤めたので、二人はそのまま長火鉢そぼの側へ坐つた。

かみさんとお照はかき餅もちと甘栗をぼりぼりやりながら酌をする。兼太郎はいつになく酔よっぱら払はらつて、

「お照、お前がおいらの娘でなくつて、もしかこれが色いろおんな女なだ

つたら生命いのちも何もいらぬな。昔だつたら丹たんさんという役廻りだぜ。はははははは。」

「丹さんて何のこと。」

「丹さんは唐琴屋からことやの丹次郎たんじろうさ。わからぬえのか。今時いまどきの娘はだから野暮で仕様がねえ。おかみさんに聞いて御覧ごらん。おかみさんは知らなくつてどうするものか。」

「あら、わたしも知りませんよ。御酒の好きな人の事を丹次郎たんじツていうんですか。アアわかりましたよ。赤くなるからそれで丹たんじ印しるしだつていう洒落しやれなんですな。」

「こいつは恐れ入った。はははははは。恐入谷おそれりやの鬼子母神きしぼじんか、はははははは。」

「のん気ねえ。ほんとにお父とつさんは。」

「酒は飲んでも飲まいでもさ。いぎ鎌倉という時はだろう、はははは。しかし大分今夜は酔ったようだな。」

「お酒のむ人は徳ねえ。苦労も何も忘れてしまうんだから。」

「だから昔から酒は憂うれいの玉たま筭ぼうというじゃないか。酒なくて何のおのれが桜かなだろう。お酒さえ飲んでいれアお父さんはもう何もいらぬ。お金もいらぬ。おかみさんもいらぬ。」

「そんな事いって、お父さん、一人じゃ不自由よ。いつまでこうしていらぬもんじやない事よ。」

「いてもいらぬなくつても最もう仕様がないやな。まアお照そんな話はよしにしようよ。折せ角かく今夜はお正月らしくなつて来たところ

ろだ。お照、お父さんのお箱を聞かせてやろうか。蓄音機で稽古  
したんじやねえよ。」

やがて亭主が帰つて来た。役者の紋をつけた双子縞ふたこじまの羽織は  
着ているが、どこか近在の者でももあるらしい身体付から顔立ま  
で芝居者ものらしい所は少しもない。どうやら植木屋か何かのように  
も見れば見られる男で、年は女房とさして違つてもいないらしい  
が、しよぼしよぼした左の目尻に大きな黒子ほくろがあり、狭い額ひたいには  
二筋深い皺しわが寄っている。かみさんは弟にでも物言うような調子  
で、

「お前さん。田島さんのお嬢さんだよ。頂戴物ちようだいものをしてさ。」  
「そうかい。それアどうも。」と言つたきり亭主は隅の方へ座つ

て耳みみたぶへはさんだエヤシツプの吸すい残のこりを手にとつたが、火鉢へは手がとどかないのか、そのまま指先で火を消した煙草たばこの先を摘つまんでいる。

「どうです。芝居は毎日大入りのようですね。」と兼太郎は酔つた揚句あげくの相手ほしさに、

「一杯けん献けんじましょう。今年の寒さむさはまた別だね。」

「ありがとうございます。御在ございます。お酒はどうも……。」と出方でかたは再びエヤシツプを耳にはさんでもじもじしている。

「田島さん。駄目なんです。奈良漬もいけない位なんですよ。」  
 「そうかい。ちつとも知らなかった。酒なんざ吞のまないに越こした事ことアないよ。吞みやアつい間違あやいのもとだからね。おかみさん、

いい御亭主を持ちなすつてどんなに仕合せだか知れないよ。」

かみさんは何とも言わずに台所へと立って膳ぜんごしら拵ごしらえをしはじめた。

路地ろじの内うちは寂しんとしてるので、向むこう側がわの待合吉川で掛ける電

話の鈴りんの音ねのみならず、仕出しを注文する声までがよく聞こえる。

「お父さん、それじゃわたし明日からまた先せんにいた日比谷のカツ  
フェーへ行きますからね。通りかかったらお寄んなさいよ。御馳ごち  
走そうしますよ。」とお照は髪かみのピンをさし直してハンケチを袂たもとに入  
れた。

兼太郎は酔よつていながら俄にわかに淋さびしいような気がして、「寒さむいか  
ら気をつけて行くがいいぜ。今夜はやっぱり一丁目の友達ともだちのここ



ろか。」

「どうしようかと思つているのよ。今夜はこれからすぐ日比谷へ行こうかと思つているのよ。今日お午過ぎひるちよつと行つて話はして来たんだし、それに様子はもうわかつているんだから。」

「今夜はもうおそ晚いじゃないか。」

「まだ十二時ですもの。電車もあるし、日比谷のバーは随分おそくまでやつてるわ。夏の中うちはどうかすると夜があけてよ。」

お照は出方の夫婦と兼太郎に送り出されて格子戸を明けながら、  
「まあいいお月夜。」

建たちこ込んだ家の屋根には一昨日おとといの雪がそのまま残つているので路地へさし込む寒月の光は眩まぶしいほどに明るく思われたのである。

「なるほどいいお月夜だ。風もないようだな。」と上りあが框がまちから外をのぞいた兼太郎は何という事もなくつづいて外へ出た。兼太郎は台処そばの側にある手水場ちようずばへ行くよりも格子戸を明けて路地で用を足す方が便利だと思つているので寝しなにはよく外へ出る。

お照は二、三步先たたずに佇んで兼太郎を待つていたが、やがて思出したように、「お父さんあの人ひとが芝居の出方なの。どうしてもそうは見えないわね。」

「むツつりした妙な男だ。もう一年越し同じ家いへにいるんだが、ろくぞつぽ話をしたこともないよ。」

「何だか御亭主さん見たようじゃないわね。わたし気の毒になつちまつたわ。」

路地を出ると支那蕎麦屋しなそばやが向側の塀の外に荷をおろしている。

芸者の乗っているらしい車が往来するばかりで人ひとどおり通は全く絶

え、表の戸を明けているのは自動車屋に待合ぐらいのものである。

銭湯せんとうは今いま方湯まがたを抜いたと見えて、雨のような水音みずおとと共に溝どぶ

から湧わく湯気が寒月の光に真白まっしろく人家の軒下まで漂っている。

「今夜は馬鹿に酔ったぜ。そこまで送って行こう。」

「お父さんソラあぶない事よ。」

「大丈夫、自分で酔ったと思つてれア大丈夫だ。」

「ねえ、お父さん。あのおかみさんは、わたし御亭主さんに惚ほれ

ていないんだと思うのよ。」

「何だ。また家のはなしか。」

「惚れていない人と一緒になると皆ああなんでしょうか。いやなものなら思切つて別れちまつた方がよさそうなものにねえ。」

「色と夫婦とは別なものだよ。惚れた同士は我儘わがままになるからいけないそうさ。お前なんぞはこれからが修行だ。気をつけるがいぜ。」

「お父さん。わたしが銀座にいた時分から今だに毎日々々きつと手紙を寄越よこす人があるのよ。わたしの頼むことなら何でもしてくれるわ。随分いろんなものを買ってもらったわ。」

「そうか。若い人かね。」

「二十五よ慶応けいおうの方かたなのよ。この間一緒に占いを見てもらいに行つたのよ。そうしたらね。一度は別れるような事があるツて言

うのよ。だけれど末へ行けばきつと望通りのぞみになれるんですツて。」

「いい家の坊ちゃんかね。」

「ええお父さんは銀行の頭取よ。」

「それじゃ大したものだ。あんまり好よすぎるから親御おやじさんが承知  
しまいぜ。」

「だから占を見てもらいに行つたのよ。だけれどね、おとうさん。  
もしどうしても向むこうのお家でいけないツて言つたら、その時は一所  
に逃げようツていうのよ。お父さん、もしそうなつたら、お父さ  
んどうかしてくれて。二階へかくまつて下さいな。」

兼太郎は返事に困つて出もせぬ咳嗽せきにまぎらした。いつか酒屋  
の四つ角をまがつて電車通どおりへ出ようとすままっすぐ直な広い往来を歩

いている。

「大丈夫よ。お父さん、わたしだつて其様向そんなむこうみ見ずな事はしやしないから大丈夫よ。カツプエーに働いていさえすれば誰の世話にならなくつても、毎日会つていられるんだから。いつそ一生涯そうしている方がいいかも知れないのよ。」

「お照、お前怒つたのか。」と兼太郎は心配してお照の顔色を窺うかがおうとした時電車通の方から急いで来かかつた洋服の男が摺すれちがいにお照の顔を見て、

「照ちゃんか。日比谷だつていうから行つたんだよ。」

「これから行く処なの。」とお照は男の方へ駈寄かけつて歩きながら此方こなたを見返り、「お父さんそれじゃさよなら、もういいわ。さよ

なら、おかみさんによろしく。」

取残された兼太郎は呆氣あつけに取られて、寒月の光に若い男女たがが互に手を取り肩を摺あわれ合して行くその後姿うしろすがたと地に曳ひくその影とを見送った。

見送うちっている中に兼太郎はふと何の聯絡れんらくもなく、柳橋やなぎばしの

沢次さわじを他の男に取られた時の事を思出した。沢次と他の男とが寄添あきらめいながら柳橋を渡って行く後姿を月の夜に見送ってもういけないと諦あきらめをつけた時の事を思出した。思出してから兼太郎はどうして今時分そんな事を思出したのだろうかとその理由を考えようとした。

お照と沢次とは同じものではない。同じものであるべきはずが

ない。お照は不届至極な親爺の量見違いから置去りにされて唯一人世の中へほうり出された娘である。沢次は家倉はおるか女房児までもふり捨てて打込んだ自分をば無造作に突き出してしまった女である。事情も人間も全然ちがっている。しかし夜もふけ渡った町の角に自分は唯一人取残されて月の光に二人連を見送る淋しい心持だけはどうかやら似ているといえ言われぬ事もない。

お照はそれにしても不人情なこの親爺にどういうわけで酒を飲ませてくれたのであろう。不思議なこともあればあるものだ。それが不思議なら、あれほど恩になった沢次が自分を路頭に迷わすような事をしたのもやはり不思議だといわなければならぬ。

帽子もかぶらずに出て来たので娘が飲ませてくれた酒も忽醒め



かかつて来た。赤電車が表通を走り過ぎた。兼太郎は路地へ戻つて格子戸を明けると内ではもう亭主がいびきの声に女房が明けるたんす箆笥の音。表の戸をしめて兼太郎は二階へ上り冷切つた鉄瓶ひえきの水を飲みながら夜具を引ひきおろ卸した。

路地の外で自動車が発動機の響を立て始めたのは、大方むこうが向側の待合からお客が帰る処なのであろう。

大正十一年一月―二月稿



## 青空文庫情報

底本：「雨瀟瀟・雪解 他七篇」岩波文庫、岩波書店

1987（昭和62）年10月16日第1刷発行

1991（平成3）年8月5日第6刷発行

底本の親本：「荷風小説 五」岩波書店

1986（昭和61）年9月9日

初出：「明星」

1922（大正11）年3～4月

※表題は底本では、「雪解《ゆきどけ》」となっています。

入力：入江幹夫

校正：酒井裕二

2018年3月27日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 雪解

永井荷風

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>